

2019年6月23日 日本基督教団 八ヶ岳伝道所「沖縄慰霊の日」主日礼拝 NO.1073
聖書 エレミヤ書 31:20／マタイによる福音書 9:36～38
説教 『肝苦(ちむぐ)りさ』

6月23日は沖縄慰霊の日。1945年同日、沖縄の日本軍司令官が自決して組織的な戦闘が終わった。国内唯一地上戦が行われた惨状は凄まじく、沖縄の民には日本軍の敗退がかすかに残る光だった。

「不屈」船長金井創牧師は自著で「肝苦(ちむぐ)りさ」という琉球言葉を紹介し、沖縄には憐れみをかける「可哀想」に相当する言葉がない、と言う。

肝苦りさとは、他者の痛みや苦しみを自分のこととして痛み苦しむこと。またエレミヤ書を示し、神の共感共苦は肝苦りさのごとくなのだ、とも。

「わたしは更に、彼を深く心に留める～わたしは彼を憐れまずにはいられない(エレミヤ 31:20)」。「彼を深く心に留める」は文語で「我が腸(ハラワタ)かれの為に痛む」と訳出されている。

また「憐れむ」はイエスの場合「腸(ハラワタ)の苦痛」と直訳できる。イエスは「弱り果て、打ちひしがれる群衆を見て深く憐れまれた(マタイ 9:36)」。つまり私たちの痛みを、腸が捻じ曲げられるように負われる方なのだ。

主なる神が「深く心に留める」ことも、イエスが「深く憐れむ」ことも、リアルな「腸の苦痛」なのだ。なんと心に迫る痛みであろう。

神やイエスのこうした御心に、あるいは沖縄の「肝くりさ」に、私たちは何を感じるのか。耳を澄ませ、自分の心にひっそり響いている御心を聞き取りたい。

どう言えばいいか、「肝苦りさ」は御心に近づくための「幾何学の補助線」になりはしないか。私たちは、神が愛の方であることを知っている。キリストの受肉も、十字架も、復活も知っている。だがこの時、この場所で、神が何を望まれ、何を語りかけておられるのか、はっきりしていない。

それでは沖縄の兄弟姉妹の肝苦りさはどうであろうか。他者の痛みや苦しみが自分のことになる。これなら分る。沖縄の現実を通して具体的に想像できる。

もしかすると神は、沖縄の肝苦りさにおいて、私たちに御心を示しておられるのではないか。肝苦りさを補助線にして、御心に近づけるのではないか。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい(マタイ 12:15)」。喜びと痛みは分離できない。泣く人と共に泣いてこそ、喜びを分かち合える。喜びを分かち合ってこそ、共に泣くことができる。

「肝苦りさ」であってこそ喜びをも分かち合いうる。私の痛みや苦しみを共にし、私の喜びを共にしてくれるキリストの兄姉。そんな兄姉が体となった教会では、「我が腸(ハラワタ)かれの為に痛む」神が有りありと生きている。

沖縄の兄姉よ、私たちの瘦せた信仰に、干からびた心に、御地の痛みを注いでほしい。

「飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている(マタイ 9:36)」私たちを見て、イエスは「深く憐れみ(肝苦り)」、御自分の「腸(ハラワタ)」に苦痛を負われる。私たちはキリストと、そして主なる神とも、根本の腸(ハラワタ)で響き合っている。

「だから、収穫のために働き手を送ってくださるようには収穫の主(マタイ)に願いなさい(9:38)」。働き手の弱さや欠けは心配ない。神が「収穫の主」なのだから。

キリストは肝苦りさで、腸という根本において私たちと共におられる(9:36)。沖縄の教会と共に肝苦りさを感じたい私たちにとって、今が「収穫の時(9:37)」。機は熟している。

私たちは収穫の働き手なのか、働き手を待つ身なのか。これまでは沖縄に働いてもらっていた。これからは私たちも働く。



《おまけのひとこと》

聖霊との旅は八重山の島々のごとく 辿り着くその島が 次の島へと導いてくれる ウミンチューは 風に従う忠実な羊 聖霊が吹かない日は飲んだり踊ったり 聖霊が吹けば水平線の向こうにまで